

---

 学 会 記 事
 

---

## 第42回新潟消化器病同好会

日 時 昭和60年7月6日(土)  
午後1時30分より  
会 場 新潟厚生年金会館

## 一 般 演 題

- 1) 早期胆嚢癌症例の検討  
—新潟県内における胆嚢癌功除例の  
分析より—

大村 康夫・篠田 主  
土屋 嘉昭・福田 喜一 (新潟大学第一外科)  
白井 良夫・川口 英弘  
吉田 奎介・武藤 輝一  
内田 克之・渡辺 英伸 (同 第一病理)

## 目的・方法

早期胆嚢癌の診断の手がかりをつかむことを目的として、1982、1983年に新潟県内で切除され、病理学的検討が充分行なわれた胆嚢癌症例76例(早期癌20例, 進行癌56例)について検討した。

## 結 果

性・年齢分布: 早期癌の男女比は1:3で年齢別分布は70才代にピークがみられ, 進行癌も同様であった。初発症状: 腹痛を訴えるものがほとんどで早期癌無石例でも80%が腹痛を訴えた。術前診断: 画像診断率はきわめて悪く正診例は早期癌では3例(15%)で他は胆石症13例(55%), 胆嚢炎2例, ポリプ1例, 胆嚢癌1例であった。肉眼型: 表面型が70%で大きさは0.2~12cm(最大径)であった。症例: 早期癌無石例で腹痛を訴えた症例では胆嚢炎を合併することが多かった。うち2例(隆起型1例, 表面型1例)を呈示する。

## 考 案

早期胆嚢癌の70%が表面型で画像による診断は困難であり, 60才以上の胆石症, 胆嚢炎では特に注意深い検査が必要である。

- 2) 早期胆嚢癌の形態学的特徴

鬼島 宏・石原 法子 (新潟大学第一病理)  
渡辺 英伸  
白井 良夫・吉田 奎介 (同 第一外科)

良好な予後の期待できる早期胆嚢癌の形態学的特徴を検討した,

## 定義・材料他

癌の深達度が固有筋層までに留まるもの, および Rokitsansky-Aschoff 洞内に留まるものを早期胆嚢癌と定義した。検索材料は, 自験した早期胆嚢癌36症例45病変であり, すべて外科的切除材料である。今回定義した早期胆嚢癌では, 36症例中23症例でリンパ節の検索が行われたが, 癌のリンパ節転移はいずれも認められなかった。また脈管侵襲や神経浸潤も全症例に認められなかった。

## 成 績

① 早期胆嚢癌の肉眼型は, 隆起型26.7%(12/45), 表面型73.3%(33/45)であり, 陥凹型はみられなかった。② 早期胆嚢癌の表面粘膜には, 腺腫内癌および純粋Ⅱb型癌を除く全例で, 密な(微細)乳頭状もしくは密な顆粒状構造が認められた。

## 結 語

早期胆嚢癌は特徴的粘膜像を呈することから, これらを捕えることにより胆嚢癌の診断も可能と考えられる。

- 3) 同一胆嚢内に独立した21個の癌が  
認められた1例

西條 康夫・岡田 節朗 (新潟勤労者医療協  
羽賀 正人・安達 哲夫 (会下越病院内科)  
山川 良一  
五十嵐 修・時光 昭二 (同 外科)  
高橋 常彦  
鬼島 宏・渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

症例 43才, 女性。主訴, 上腹部痛。12月8日上腹部痛出現, 増強するため9日当院入院。エコー, CTで胆嚢結石, 肝内胆管拡張, 総胆管拡張を認め, 急性化膿性胆管炎の診断で治療を行った。1月10日, 胆嚢結石, 総胆管結石の術前診断で単純胆嚢摘出術, 総胆管切開, 乳頭形成術を学った。摘出胆嚢底部に乳頭状隆起性病変があり, その周囲に小乳頭状隆起病変が散在していた。その病理組織学では, 最大の病変は漿膜下層まで浸潤している乳頭管状腺癌であった。また正常粘膜を隔てて20コの癌が独立して認められ, 癌周囲への表層拡大はなく, 化生粘膜もほとんど認められなかった。本例は単純胆嚢摘出術では不充分であるため, 今後再手術を予定している。

- 4) 当院における胆嚢癌摘除例の検討

広田 正樹・福田 稔 (白根健生病院外科)  
加藤 英雄

過去5年間で当院で摘除可能であった胆嚢癌症例は13

例であった。これら13例に対し検討を行ない若干の文献的考察を加え報告する。年齢は53才から81才で平均は68才であった。性別は男性3例、女性10例であった。胆石保有症例は9例(69%)であった。術前診断は胆嚢癌は1例で、他は胆石症又は胆嚢炎であったが、このうち4例は術中の摘出胆嚢の肉眼的観察にて胆嚢癌と診断し、一期的に治療手術を施行した。手術々は胆嚢摘除術7例、胆嚢全層摘除術1例、肝床楔状切除術5例であった。これら13例中12例は治療手術であった。予後は他病死2例を除いた11例中5例は再発の所見なく生存中である。

結語：当院での胆嚢癌は胆石症の手術によって偶然発見されることが多いため、今後、胆嚢癌の術前診断に対するより一層の工夫が必要であり、無症状胆石症に対しても積極的に手術を施行し、胆嚢癌症例の発見に更に努力したいと思う。

#### 5) 胆管炎に関する検討

一特に胆汁内白血球数を中心に一

清水 武昭・長谷川 滋(信楽園病院外科)  
 関根 理・薄田 芳丸(同内科)  
 青木 伸樹・湯浅 保子(同内科)  
 渡辺比登志・渡辺 京子(同検査科)

我々は以前より胆管炎に対し、さまざまな角度より検討を重ねてきた。胆管炎は腎障害型胆管炎と肝障害型胆管炎とに分類可能であった。腎障害型は症状が激しく診断も容易で、腎不全、呼吸不全に至ることもあるが、多くは一過性である。一方肝障害型は減黄率 b 値は上昇し、膿性胆汁となる等が典型的であるが、臨床的に診断のむずかしい症例も多い。PTCDを行なうと、しばらくしてすべて胆汁内細菌が陽性になることも診断をむずかしくしている。

最近我々は胆汁内白血球数の測定を始め、胆管炎の診断に有意差と思われたので報告した。方法は尿沈査と同様に、胆汁採取後ただちに遠沈し、尿沈査染色液で処理後、鏡検し、1視野に多数、30個、10個、1個、無の5段階に分類、検討した。減黄率 b 値上昇を確定診断とすると100%の確診率であった。その際、CRP、血中白血球数の増多はみられぬこともあった。

#### 6) Lithotripter (経十二指腸的総胆管結石砕石器具)の使用経験

丹羽 正之・五十嵐良典(県立ガンセンター)  
 加藤 俊幸・齋藤 征史(新潟病院内科)  
 小越 和栄

内視鏡的乳頭切開術(EPT)の普及により、総胆管結

石の内視鏡的摘出は比較的容易となった。しかし巨大総胆管結石例ではEPTの大きさの限界からも現在のバスケットによる摘出は総石把持のまま抜去不可能となる場合もある。このような症例に対して、胆石砕石器具を用いて巨大結石を破壊し摘出に成功したので述べる。対象は、76才、75才の片麻痺を有した脳血管障害例の2例と、68才の胆摘除後の胆石再発例1例の3例である。結石の最大径は、撮影フィルムで35×23mmである。胆摘後再発結石例は、多発結石で最大径15×10mmでありEPTにもかかわらず排石不良のため本器具を用いて1週間目に全ての結石が消失した。他の2例のうち1例は傍乳頭室例で総胆管下部の狭窄を有する14×18mmの結石例であったが、砕石バスケットにて結石は破壊され総胆管狭窄にもかかわらず容易に排石された。

#### 7) 当科における大腸結核症の検討

永田 邦夫・須田 陽子(新潟大学第3内科)  
 富沢 峰雄・成沢林太郎(新潟大学第3内科)  
 市田 文弘

昭和50年4月より昭和59年4月までの間に6例の大腸結核症を経験した。症例は平均年齢50才で、男性2人、女性4人であった。肺結核を有した例は、活動性2例、陳旧性2例で、他の2例は家族に肺結核を認めた。主訴は軟便や腹部不快感等軽い例が多く、X線及び内視鏡にて診断され、結核菌の証明された4例のうち3例は生検組織によった。また4例に肉芽腫が認められた。ツ反はいずれも強陽性を示したが、病勢との相関はなく、病勢判定には内視鏡観察が必要であった。治療によく反応する例が多く、治療診断は1ヶ月の期間で可能であると考えられた。また治療後粘膜のひきつれを残す症例が多いが、狭窄のため手術を要する例は認められなかった。

以上、当科における大腸結核症6例を報告した。

#### 8) 長期観察により診断しえた小腸

クローン病の1例

佐藤 明・佐野 正俊(新潟市民病院)  
 何 如朝・木村 明(消化器科)  
 齊藤 英樹・丸田 宥吉(同第一外科)  
 横山 道夫(同放射線科)

症例：40才男性、HBVキャリア。20才時痔瘻手術施行、その後肛門症状はない。

昭和54年より不定腹部不快感、腹痛が出現し始め当科で上部内視鏡。注腸造影検査により十二指腸炎、過敏性大腸と診断し、通院していた。57年2月激しい下腹部痛出現し、ダグラス窩膿瘍の疑いにて開腹手術施行し、腹